

秦 郁彦著

『盧溝橋事件の研究』

江 口 圭 一

1

著者は日中戦争の発端となった盧溝橋事件研究のパイオニアである。盧溝橋事件は著者の最初の学術論文の主題であり、著書『日中戦争史』（一九六一年）に収められた。同書に「序」を寄せた信夫清三郎氏は、「精密な資料調査と厳格な資料批判にもとづいて書かれた本書は、昭和の戦争史にはじめて科学の光をあてたものである。今後いかなる昭和政治史の研究も本書をとらなくては不可能である」と絶賛した。とくに事件の当事者である清水節郎手記を中心として構成された盧溝橋事件に関する記述は、以後の研究の基準となった。

その後も著者は盧溝橋事件についていくつもの論文やエッセイを発表してきたが、著者にとって、というよりは広く研究者にとって、ネックとなったのは中国側の資料が十分に確保できなかつたことである。しかし、一九八七年の盧溝橋事件五十周年前後から、中国で公私にわたる関係資料の公開がはじまり、台湾でも資料の公開がすすんだ。

著者はこれらの中国・台湾の文献を博搜し、日本のその後の研

究・資料にも広く目をくばり、九三年には盧溝橋周辺の実地踏査をおこなって、本書に集めた。著者が「本書で扱った主要な参考文献」は、日本側公式資料一五、日本側当事者の手記・回想二六、中国側公式資料九、中国側当事者の手記・回想一四、牟田口連隊関係者のヒヤリング・書簡二一、その他のヒヤリング・書簡四一を数え、さらに日中双方の関係者の著書、研究書、一般書、研究論文を網羅している。研究史に確固とした地歩を刻んだデビュー作から三六年をへて、あたかも事件六〇周年の年に、このような大著を世に問うたところに、この事件への著者のこだわり、執着、情熱のほどが示されている。

本書の主題は盧溝橋事件そのものであるが、あわせて満州事変以降の前史と三七年七月末前後にいたる事件の処理過程が考察の対象となされている。

前史部分には第一―三章があてられている。「第一章 日本の華北進出」は六節から構成され、「一九・一八から七・七まで」では、三五年以降の華北分離工作について日本の政策アクターへの観察がなされている。内外政策を主導したのは軍部であるが、軍部は一枚岩であったのではなく、参謀本部支部課出身者および関東軍が中国本部進出を牽引し、「石原莞爾らの政策転換の試みを圧した。

「二 梅津・何応欽協定」は、同協定および土肥原・秦徳純協定を「華北分離工作の本格的な第一歩」とし、「関東軍を中心に出先関係者による長期的展望をふくむかなり周到な共同謀議と、軍中央部の原則的の了解を固めた上で発動し」、軍部が「ほぼ一枚岩の結束で臨んだ」ものととらえ、これに対し「中国側は迅速で

整然とした退却ぶりを見せた」と述べている。

「三 冀察・冀東政權の誕生」は、華北五省に「中央政權から独立した親日傀儡政權を樹立しようとした陸軍の大型謀略工作」が、国民政府の幣制改革を軸とする抵抗にあり、結局両政權の樹立に矮小化する過程を述べる。なお著者が両協定締結を「第一次華北分離工作」、両政權樹立を「第二次華北分離工作」と区分するのは、評者には初見に属するが、このような区分が必要か、むしろ一連の動きとしてとらえるべきではないか、疑問が残る。

「四 川越・張群交渉」では、日中戦争前における最後の外交交渉である同交渉および緩遠事件を述べ、「五 中国再認識論の台頭」では、石原莞爾による政策転換の試みと佐藤外交をとりあげるが、研究史上の一争点である佐藤外交の評価については、「具体化の段階で袋小路に追いこまれ立往生した公算が高い」というのが著者の判断である。「六 『攘外』へ向う中国」は、三五年から西安事件のクライマックスにいたる中国の対日政策の展開をあとづける。

「第二章 盧溝橋事件前夜（上）」は五節から構成され、事件直前の時期の現地情勢を主に日本側について概観するものである。「一 陸軍の对中国戦備」では、帝國国防方針、年度作戦計画、対ソ戦準備問題などが検討され、「二 支那駐屯軍と駐兵権」では、支那駐屯軍について三六年四月の増強問題を中心に説明がなされる。「華北問題の処理を支那駐屯軍に専任させ、関東軍の介入を制限しようとした中央の狙いは必ずしも達せられ」ず、「中国側はかえって武力による明示的威嚇と受け止め」たという指摘は的確である。なお義和團事件について、日本は「他の一〇カ国

と共同で……出兵」は、七カ国が正確であろう。

「三 第三大隊と演習」は、盧溝橋事件の主役と舞台について、ひととき著者ならではと感じ入らせる刻明な記述がなされる。著者は問題の演習は「合法的」ではあったが、「正当性」の問題は残った」と評する。「四 嵐の前の静けさ」は、事件直前の時期の日中間の諸紛争をとりあげているが、第二次豊台事件については、盧溝橋事件に大きな影を落としており、今少し詳論されてもという感がする。「五 乱れ飛ぶ流言」は事件前後のさまざまな流言を考察する。

なお本章以降、第八中隊幹部の集合写真、第二次豊台事件の「謝罪式」の写真など、研究書としてはおそらく初出の珍しい映像が数多く掲載され、本書の価値を高めているが、それだけに写真の出所を示してほしかった。

「第三章 盧溝橋事件前夜（下）」は前章に対応する中国側の動きと地名・文献に関する七節からなる。「一 中国の対日戦備」は、中国軍の組織・装備・士気・作戦などを総合的に考察する。間然とするところのない記述であるが、「文首章」は近年は「識字率」で表すのが通例となっていよう。「二 冀察政權と宋哲元」は、中国側の主役である宋の変転・遊泳ぶりが描かれる。「三 盧溝橋の第二十九軍」は、当事者の第二十九軍の戦力・戦備を述べ、事件が「現場の中国側当事者から見ると、爆発寸前の張りつめた空気のなかで起きた」ことを明らかにしている。「四 華北の諸勢力」は、冀察政權以外の諸政治力・軍勢力を考察し、「五 中国共産党と救国運動」は、主題を詳論して、とくに中共党北方局書記劉少奇の役割に注目する。

「六 地名考」は、盧溝橋・宛平県城など事件に関連する重要地名を解説し、「七 主要参考文献と解題」は、すでに紹介した日中の文献を網羅して二〇ページに及ぶ。

2

「第四章 七月七日夜の現場」以降が本書の主題であって、この章は一〇節から構成される。記述は「一 第八中隊、演習地へ」からはじめられるが、「北平ニュース」により七月七日一〇日の北平の気象を明確にしていることに、著者一流の精密さが示されている。「二 夜間演習」は、七月七日夜二三時四〇分頃最初の銃撃に至るまでの第八中隊の演習状況を確認する。「三 『第一発』の検証」、「四 志村二等兵の失踪」は、衝突の引き金となった二つの事件をそれぞれ検証する。「五 大隊主力の出勤」は、清水第八中隊長から伝令による報告に接した豊台の一本第三大隊長が、北平の牟田口第一連隊長の指示のもとに、大隊主力を盧溝橋へ出勤させた経過を述べる。本節の疑問は、大隊出勤を決定した一本の判断ないし動機・目的について、なぜか著者が触れないことで、この問題については後述したい。

「六 失敗した捕虜獲得行」は、八日の払暁攻撃の直接のきっかけとなった午前三時二五分の銃声にかかわる日本軍側の動きに触れたものである。「七 盧溝橋の中国軍」は、この間の現場中国軍の動静を中国側の証言・回想により検討する。「八 疑問点の四例」は、従来の研究から四例の疑問点をとりあげ、第八中隊の仮設敵が実弾を射った可能性はないこと、志村二等兵の「行方不明」は故意ではないこと、志村発見の報告が遅れたのは故意

ではなく失策であることという見解を述べ、最初の銃撃が中国軍によるとする説を「根も葉もない」とみる中国側の見解は「公正ではない」とする。

「九 発砲者を探索する（上）」、「一〇 発砲者を探索する（下）」は、著者が『日中戦争史』以来もっとも深くこだわってきた主題であり、著者にとっては本書の核心をなすものである。その探索は詳細をきわめるが、著者の結論のみを紹介すると、「第二十九軍の兵士たちによる偶発的射撃」であり、その最有力の根拠は一九八六年に公表された中国側の現場指揮官金振中の回想記に求められている。評者もこの結論を支持する一人である。

「第五章 七月七日深夜の現場周辺」は七節から構成される。「一 特務機関の交渉」では、北平特務機関を軸とする日中間の交渉経過を述べる。「二 牟田口連隊長の判断」は牟田口の判断の変転ぶりを追求する。著者によれば、牟田口の本木にたいする「営長を呼び出し交渉」せよという最初の指示が「何を指すか必ずしも明瞭でないが」、三八年の牟田口回想から、兵行方不明よりも「不法発砲」の「責任追及に重点を置いたものかと思われる」と推定される。この点は、先述の本木の判断の問題と合わせ、後で検討したい。

「三 暁の攻撃発動」は、八日午前三時二五分の第二回銃声から早暁の武力衝突にいたる過程を述べる。評者は「第一発」問題や兵行方不明問題を決して軽視するつもりはないが、七月八日朝の日中間の戦闘について「秘密にはこれこそが盧溝橋事件である」（江口「盧溝橋事件」岩波ブックレット、一九八八年）と認識している。このような評者の立場からすると、本節の記述が四

ページあまりにとどまっているのは、「第一発」問題に費やされた紙幅にくらべ、淡泊にすぎるといふ印象を拭えない。

「四 支那駐屯軍の対応」は、同軍司令部の対応ぶりを追求し、
「五 東京裁判の秦徳純証言」は、中国側の多くが依拠している秦証言の疑問点を追求する。「六 中国軍の応戦」では著者は、行方不明の志村発見の時点で一木が「豊台に引き上げること」を決していたら、事態はそれで収束していたに違いない」とする安井三吉氏の所論（『盧溝橋事件』研文出版、一九九三年）や、「牟田口、一木こそ盧溝橋事件拡大の元凶とみなす所論」（明示されていないが、おそらく評者を指すものであろう）を引きあいにだし、「日本陸軍の現場指揮官という枠を考慮すれば」、「連隊長の処置はそう非難する程でもあるまい」、「大隊長の応戦に関する決意を認めぬ訳には参りません」といった橋本支那駐屯軍参謀長・河辺旅団長の「所感が妥当なところであろうか」と述べる。この点で評者は著者と評価を大いに異とする。「七 検証」は、七日深夜から八日早朝にかけての中国側の動きに関する証言の矛盾や混乱の理由を検討する。

「第六章 七月八日―十一日の現地情勢」は八節から構成される。「一 城内の交渉（七月八日）」、「二 七月八日の戦況」、「三 停戦協議（七月九日）」、「四 保安隊の受難」、「五 竜王廟の夜襲（七月十日）」、「六 現地停戦協定の成立」は、七月八日から十一日の現地停戦協定の成立にいたる間の、支那駐屯軍司令部・北平特務機関対冀察政権および現地日中両軍によって織りなされた錯雑な戦闘・停戦・抗争・妥協の過程を入念かつ明快に解析して、ほとんど余すところがない。「七 関東軍の圧力」は、かね

て華北問題に強硬方針をとっていた関東軍が、盧溝橋事件を好機として開始した積極的行動を追跡している。

「八 総括」は、七月八日から十一日にかけての現地軍の対応を総合的に観察する。その記述で著者は、牟田口・一木の判断・対応ぶりを改めて取り上げ、評者が七月八日の戦闘は両者の「メソツのために、もつと端的にいえばかれらの腹いせのため」しかけた攻撃であり（江口『盧溝橋事件』）、二人の「浅慮が戦争を火させた」（江口『十五年戦争小史』）と「責めている」ことを批判し、「軍の威信やメンツにこだわるのは、どこの国でもありふれた職業軍人の本能であり、彼らに一方的な自制を求めるのは酷にすぎよう」と述べる。この評価の対立については後でとりあげたい。

3

「第七章 華北派兵への道程」以降は事件の処理過程の考察であり、この章は八節から構成される。「一 七月八日の陸軍中央部」は、七月十一日に停戦協定が成立したにもかかわらず、「全面戦争の危地に旋回していったのは、それまで現地まかせのスタンスをとっていた東京と南京が……大兵力を動員する介入策に踏み切ったからである」と概括したうえで、陸軍中央の拡大派・不拡大派の対立問題に入る。「二 派兵内定をめぐる陸軍の内情」は、大規模派兵決定にいたる陸軍中央の内情とくに石原莞爾の心境を検討する。「三 拡大を予期した海軍」は、「一枚岩の海軍は全面戦争への突入を見越して、いち早く整然たるプログラムを組んだ過程を明らかにする。「四 形ばかりの外交交渉」は、交渉が

南京の日高參事官と中国外交部との数回の形式的なやりとりで終わったこと、この間の広田外相の無力ぶりが指摘される。

「五 華北派兵を決す」は、七月十一日の派兵決定にいたる過程を述べ、この決定の責任は「近衛首相をふくむ内閣が負うべきである」が、「責任意識は希薄で、むしろ被害者意識のほうが強い」と指摘する。「六 派兵声明の波及効果」は、それが「国民の戦争熱を煽り、現地停戦協定がないがしろにされる状況を述べる。「七 北上」する中央軍」は、この間の国民政府の対応と中国軍の北上の実状を明らかにする。「八 中国共産党の通電」は、しばしば中共謀略説の根拠とされる七月八日付けの中共通電を検討し、八日の日付は疑問であるとする。

「第八章 拡大か不拡大か——日本側——一九三七年七月末まで——」は八節から構成される。「一 天皇と近衛首相」は、昭和天皇が「対支譲歩と不拡大論を支持する」立場にあったこと、また近衛の「ピント外れの情勢分析や、度を越した楽天性と責任感覚の欠如」のほどを明らかにする。「二 外務省と広田外相」は、広田の「いささか虚無的で投げやりともとれる無気力な姿勢」を描く。「三 陸軍中央部」は、七月十一日派兵声明から二十七日の平津総攻撃発動にいたる陸軍中央の曲折した動きを追求する。「四 現地軍(上)——対峙」は、七月十一日から二十四日頃にいたる現地軍の動きを検討し、とくに新任の香月支那駐屯軍司令官の変転ぶりを明らかにしている。「五 現地軍(下)——通州事件まで」は、廊坊事件、广安門事件、南苑総攻撃、宛平界城の攻略、通州事件、天津の戦闘をあとづける。「六 海軍の硬論と軟論」は、七月十一日から第二次上海事変勃発にいたる

海軍の動向を分析する。「七 マスメディアと世論」は、各紙の社説と大みだし・美談の落差はあるものの、陸軍の拡大派を満足させるような世論形成がすんだことを明らかにする。

「八 総括——拡大派と不拡大派」は、両派のせめぎあいの総括的観察である。著者は両派の分布状況を確認したうえで、月中旬頃まで保たれていた両派の均衡は、武藤作戦課長と田中軍事課長という省部を横断するコンビの「推進力と、参本の部長会議で石原第一部長を牽制した第二部の動き」によって崩され、「田中」武藤ライン」が「全面戦争の構えで押し……初志を達成したと結論」づけている。ついで著者は不拡大派の石原が「なぜ自身の理念と相容れないはずの派兵を簡単に承知するに至ったのか」を検討し、「なまじ中国の抗戦意欲の高さを警戒したことが、裏目に出」たこと、「石原も軍事官僚機構のなかでは五人いた部長の一人にすぎ」なかつたことなどをあげる。この問題について、井上寿一氏は「危機のなかの協調外交」(山川出版社、一九九四年)で「石原は華北五省を対象とするこれ以上の分離工作の拡大には反対したものの、冀東政権に端的に示される華北における既成事実については、これを温存し、撤回する意志はなかつた」と述べている。満州国第一主義と不拡大論が華北分離論と拡大論と「通底していた」ことは無視しえないのではないだろうか(江口「日本の侵略」歴史学研究会編「講座世界史6 必死の代案」東京大学出版会、一九九五年)。

「第九章 拡大か不拡大か——中国と列強」は六節からなる。「一 国民政府と廬山声明」は、蒋介石の「最後の関頭声明」を分析し、蔣が華北決戦を避け、主戦場を上海へ誘致する戦略をと

ったことを明らかにする。「二」動揺する冀察政權」は、抗戦をめぐる宋哲元の動搖・曲折を仔細に追求する。「三」謎の策動と中国共産党」は、今日なお一部で抱かれている中共陰謀説に根拠がなく、盧溝橋事件が共産党にとって「予期しない偶発事」であったことを実に説得的に証明している。「四」沸騰する抗日世論」は、中国各紙を検討し、主戦論の形成過程を述べる。「五」國際環境(上)——英米、「六」國際環境(下)——ソ独」は、それぞれ各国の事件への反応を概括する。

「おわりに」で著者は、盧溝橋事件を局地的に收拾できなかった理由について、「政策アクター」ごとの意図や判断を比較検討し、「同じ争点を日中双方の視角から観察する手法」によって解明したと述べる。さらに著者は、「心理的要因」をめぐる「相互反応的」アプローチを重視したと述べ、日中双方の中央と現地の四つのアクターの「戦意」「危機感」を組み合わせた「危機曲線」を提示し、「戦争突入に対するかなり有力で持続的な抑止力が働いていた」にもかかわらず、日中双方の「不信」「誤算」の「相乗効果」によって破綻がもたらされたとする。

巻末には、「支那駐屯歩兵第一聯隊第三大隊戦闘詳報」「金振中回想記」など「資料」六篇、「あとがき」、「図表一覧」、「索引」が付される。

4

著者は「あとがき」で、

「事のしだいを過不足なく」復元するには、相手側の言い分とつきあわせる作業が欠かせない。……調査と執筆にさいし一切

の政治的・情緒的配慮は加えないことにした。

と書いている。相対化と均等化、実証と禁欲が本書を貫く観点であり手法である。その結果については、著者は「事件自体と直接に連動した初期の約三週間については、ほぼ事実経過の復元を果たせたと思う」と述べているが、この自負に誤りはない。日中双方の諸アクターの動きを、バランスを不断に維持しながら、緻密に解剖し明快に復元した本書は、あたかも重厚な細密面を観る感をあたえる。とくに三五の表と一〇の図は、その多くが本書の実証性のほどをいかに示す著者の独創的な作業である。旧著から三六年をへた時点で、著者はさらに揺るぎのない基準を提示した。評者の本書への疑問ないし異論の主なものとは次の二点である。一つは盧溝橋事件そのものの評価である。評者は事件を次の三つのステージでとらえる。

I 発端 A 統撃(第一発) B 兵行方不明

II 展開 一木大隊の出動

III 帰結 七月八日早晩の交戦

このうち著者がもつとも関心を集注するのはIとくにAである。その結論を評者も支持することはすでに述べた。しかしIに比べると、本書のIIの分析は手薄の感を拭えない。前に書いたように、著者は大隊出動を決意した一木の判断・動機・目的に触れない。この決意について一木は事件一周年の回顧座談会(『東京朝日新聞』)で、「私も射たれたというだけならピンと来なかったが、兵隊が一人おらんということになったら一大事だと思ひまして、すぐ警備呼集をやる決心をとった」と語っている。きわめて明快かつ重大な発言である。少なくとも一木にあつては問題の発端はI

Bにあった。ところが志村は無事帰隊した。出動の理由も必要性も消滅した。しかし一木は「これで打ち切ったということになると支那側は何と宣伝するか分からぬ。……実弾射撃をやれば日本軍は演習をやめて逃げて行くといふ観念を彼等に与へるのは遺憾だから……軍の威信上奮起した」。出動の理由・必要性はI Aに転化され、最初は「ピンとこなかった」ものが「不法射撃」として重大化した。

牟田口の場合は一木のように明瞭ではない。著者が三八年の牟田口回想からBよりAに重点を置いていたと推定したことは前述した。しかし八日午前二時二〇分の牟田口から松井北平特務機関長への電話では、

1 行方不明の兵は無事なること判明せり。したがって我軍は何等の損害もなし。

2 解決条件として旅団は日本軍の演習を害し不法発砲せるは皇軍に対する最大の侮恥なるを以て……

とある。この文脈からすれば、牟田口にあってもB→Aの転化があったという推定も十分になりたつのではないか。

評者がかつて安井三吉『盧溝橋事件』の書評(『歴史学研究』六六六号)で、

特に重点が置かれているのは、いわゆる「第一発」問題と「兵一行方不明」問題との関連である。実は小著『盧溝橋事件』は、資料的には何の目新しさもないが、従来の文献では必ずしも明瞭にとらえられていなかったこの両問題の検討をはじめめて検討した点にささやかなメリットがあったものと自認している。著者は……小著とほぼ同一の視角による精緻な分析を加

えている。

と書いた。しかしこの問題について本書はなぜか立ち入るのを避けている。

その結果はⅢの分析・評価にも影響をもたらす。著者は、前述のように、評者などの「牟田口、一木こそ盧溝橋事件拡大の元凶とみなす所論」を批判し、「ありふれた職業軍人の本能であり、彼らに一方的な自制を求めるのは酷にすぎよう」と弁護する。しかも著者は他方で、牟田口・一木が軍周囲から「豪腹、勇猛の士」とか「闘士満々の士」とみられ、事件の処理を左右したとみなされていたことを手落ちなく紹介している、「職業軍人の本能」に一般化するのには、情状酌量のしすぎではなからうか。

さらに著者は「おわりに」で、「第一発は大それた意図を伴わぬ『孤立した一行為』に近かったのだが、当事者の反応は違った。それでも支那駐屯軍と第二十九軍の出先同士は、暗黙のうちに偶発事故として局地的に片づける方向へ進みかけた。しかし中央政府レベルでは……」と総括していく。「当事者」から第一線は飛ばされ、牟田口・一木の所為・責任は不問に付される。

このような盧溝橋事件の評価は、著者のめざした相対化・均等化という手法と無関係ではないであろう。この手法は見えなかつたものが見えるようになるメリットをもつが、逆に見えるはずのものが見えにくくなるデメリットもある。なぜなら、相対化・均等化は日中双方が同じ地平に立っている場合において真に成立し有効となるであろうからである。評者の本書への主な疑問ないし異論の今一点はこのことにかかわる。

山口正之氏(日本中国友好協会会長)は、犬丸義一氏の質問に

答えて、「盧溝橋事件で兵隊が一人行方不明になったとか、どちらが先に弾を撃ったかなどというのは話にもならない。どだいそこに日本の軍隊がいるということがおかしいんだから。……盧溝橋事件はおこるべくしておこった」という（『反戦・平和に生きる』『季刊中国』一九九七年夏季号）。評者はこのような本質顯現史観ないし帝国主義侵略必然論に与することはまったくできない。しかし、「土肥原・秦徳純協定とか、蒙疆……における国民党勢力の排除工作が着々と進行して、その仕上げとして盧溝橋事件が起こった。ですから、だれが先に発砲したかということは、歴史の記述としては重要なことですが、事件の性格を決定する決定的原因ではないと思います」という石堂清倫氏の発言（座談会「満鉄と日中戦争」『世界』一九九七年八月号）、あるいは「確かに最初の一発がどこから来たかいまだにはつきりしない。しかし……一発でもあつたら必ず戦争になる、偶発は必発になるという状況であつた」という野村浩一氏の発言（座談会「世界戦争のなかの日中戦争」『世界』一九九七年七月号）には、共鳴ないし共感を禁じえない。

すでに満州事変と華北分離工作を通じ日中間には侵略と被侵略という深い落差が作られていた。中国は大きなハンディを負っていた。この落差・ハンディを計量の外におき、両者を相対化し、双方の「不信」「誤算」を均等に扱うのは、かえって問題の焦点を拡散させるのではないか。

評者はこのような異論ないし疑問をもつけれども、「事実経過の復元を果」した本書の成果に、「研究仲間」の一人として、重ねて賛辞をおくるとともに、事件六〇周年を飾る日本におけるこ

の学術貢献が中国・台湾でどのように受けとめられるか、刮目して見届けたい。

（A5判 X十四一九九頁 一九九六年二月 東京大学出版会

七〇〇四円）

（愛知大学法学部教授